

想う がままに

忘れがたき人 ① 安東仁兵衛さん

本誌編集委員 小寺山 康雄

今号から折に触れ、本誌と何らかの関わりのある今は亡き人を順不同で懐旧したい。順不同といっても、トップ

バッターはやはりこの人でなければならぬ。一九五九年の第一次『現代の理論』の創刊から八九年第二次『現代の理論』の休刊まで、五年間の中断をいれると三〇年にわたって本誌を編集発行してきた安東仁兵衛（一九二七—一九八年）アンジンさんである。

統社同結成大会が最初の出会

アンジンさんとの最初の出会いは、一九六二年五月統一社会主義同盟（統

社同）の結成大会においてである。ぼくは二二歳、アンジンさん三五歳のときである。

前年七月に共産党と決別したぼくらは、社会主義革新運動を経て、日本での最初の構造改革派の政治組織を旗揚げした。同盟員は千人に満たず、しかも半数以上が学生という吹けば飛ぶような小さな組織だったが、気概だけは意気天を衝く勢いであった。ぼくらにとつては雲上人のような戦前からの非転向の闘士に加え、アンジンさん以下第一期全学連、産別会議の猛者たちが学者に、労働運動活動家に、そして革

命家としてそこに居るだけで、ぼくらは未来を信じられたものだ。大会が終わり、帰り仕度をしていたぼくをアンジンさんが呼び止めた。「おいコテラ。帰りは北陸廻りで帰れ。新潟、富山、石川に統社同に入りそうなグループがいる。それをオルグしてこい」というのだ。「帰りの汽車賃しか持つてませんが……」というのと、「それで充分だ。みんな欲待してくれるだろう。足りない分はこれ売って飯代にせい」と言つて『結成宣言』をリユックにいっぱい入れて押し出された。

北陸廻りで神戸までの切符を買うと

えなかつた。

三十円しか残らなかつたが、ぼくはこれもシヨツカク(職業革、命家)修業と、勇躍新潟行きの夜行に乗つたのである。新潟の江川弘さんとこの今日に至る交流はこのときからであり、新潟大、富山大、金沢大にそれぞれ学生支部ができた。このオルグ旅行で、ぼくはアンジンさんの眼鏡にかなつたのだから、東京に行くたびに経堂の家に泊められ、シヨツカクの心得を諭されることになるのである。ついにはつれあいの教職口は保障するから東京に出て来いとまでいわれたが、これだけはアンジンさんの言うことでも聞けませんと断つた。まことに正解だつたと思う。

時代の先端をいった雑誌

一九六四年二月号を創刊号とし、八年十二月号を休刊号とする第二次『現代の理論』は、誰もが認めるようにアンジンさんの独特のキャラクターと八面六臂の活躍を抜きにしてはあり

アンジンさんは戦後東大退学処分第一号という名誉ある称号をもつていゝる。東京大学というのは権威主義の塊であり、実に嫌味な大学である。ストライキの首謀者は理由のいかんを問わず必ず退学処分を喰うが、一年後にはこれまた必ず復学する。ただし前非を悔いる書類を出さねばならない。アンジンさんは「どうして反省しなければならぬのだ」と言つて「反省書」に署名しなかつたので復学できなかつたのだ。この嫌味で権威主義的な慣行を楯にとつて、アンジンさんに署名をさせないよう挑発したのは、のちに最高裁長官になる当時法学部長の横田喜三郎であつた。

ところが、理不尽な処分に同情し、アンジンさんの潔さに感動した東大をはじめとする学生運動活動家や若手学者がアンジンさんへの義理から『現代の理論』に無償の協力をしてくれるよ

うになるのだから、何が辛いかわからない。第二次『現代の理論』はアンジン処分なくしてありえなかつたといつてもよいとぼくは思うのだ。

グラムシ思想の精力的紹介にはじまつて、ユーロ・コムニズム・ソシアリズム、政治権力奪取に一元化されないトータル革命、多元主義、複数前衛党、労働者自主管理、アソシアシオン、エコロジズムなど「社会主義の再生とマルクス主義の創造的発展」とつて、現在でもキーコンセプトになつてゐるテーマが、六〇年代中葉から七〇年代にかけて、すでにこの雑誌を賑わしてゐる。くわえて日高六郎、丸山真男など非マルクス主義者との思想交流も積極的、意識的におこなつたことが『現代の理論』の他の左翼雑誌にないすぐれたところだ。

七〇年代後半からアンジンさんは急速に社会民主主義に傾斜していった。板割りの浅太郎よと嘯いて、江田三郎

の遺児江田五月や菅直人の後見人を
買って出て、社会民主連合の政策委員
長まで引き受けた。そのうえ七九年に
は自ら社民連候補として東京四区から
立候補するのである。故池山重朗さん
もアンジンさんに唆されて立候補した。
二人とも惨敗したのはいうまでもない。

ぼくは渡世の義理で選挙カンパを集
めたが、そのことで故大森誠人さん、
沖浦和光さんから親社会党の先輩たちと
大喧嘩をした。お前が変な動きをする
とわしらまで社民連シンパと誤解され
るといなのだ。新左翼のぼくにとつて
は社会党も社民連も等距離である、ゴ
タゴタ言われる筋合いはない、とぼく
はつつばねたが、アンジンさんも道楽
がすぎると恨んだものである。

でも、この頃からぼくはアンジン流
変わり身の速さに違和感を覚えるよう
になった。大阪でやっていた社会主義
理論政策センターの例会にアンジンさ
んを招いて講演をしてもらったときに

も、かみついた。アンジンさんのベル
ンシュタインとSPDのバートゴード
スベルク綱領の無条件賛美を正面から
批判した。

カウツキーに対するベルンシュタイ
ンのリアリズムを評価するのであれ
ば、レーニンのリアリズムとの対比を
おこなわねば歴史的评价たりえない。
バートゴードスベルク綱領はベルリン
新綱領と対比させねば、SPDの正当
な評価にならない。ラフォンテーヌ
(住沢博紀訳)の『国境を超える社会
民主主義』という新しい社会民主主義
の誕生を告げる本を刊行したアンジン
さんの言とは思えないとまで言った。

肺がんを発病してから二回お見舞い
に行った。朝日新聞の死亡記事では、
晩年のアンジンさんはリベラリストに
されている。アンジンさんが目をかけ
ていた江田五月や菅直人はほつとした
だろう。しかしこれだけは言っておこ
う。ぼくとだべったアンジンさんは社

会民主主義まで捨て去った江田や菅に
悲憤慷慨していたことを。

アンジンさんは最初に逮捕されたと
き指紋をとられたくないため、取調官
が席をはずしたときに、後ろに手を廻
しライターで指紋を焼ききろうとし
た。それを聞いた隣房の浅草の大親分
は「兄さんはみごとな侠だよ。堅気に
しておくのはもつたいたい。畳の上で
死のうなんてこれっぽっちも考えちゃ
ならねえよ」と感嘆したという。

六九年、グラムシと構革思想を捨て
た統社同をぼくもアンジンさんも離れ
た。『現代の理論』に専念するという
アンジンさんに、つれあいの年子さん
は「わたしは革命家のあなたのために
働いてきたのであって、雑誌の編集長
にするためにはありません」と大見
栄を切った。その恋女房に末期の水を
とってもらい畳の上で死んだアンジン
さん。あの世で浅草の大親分にどんな
仁義を切っているだろうか。